



レンズを通して

連載「六月」

写真・文 高円宮妃久子殿下

カイツブリ

全長27cm カイツブリ科

ユーラシア大陸の中南部、アフリカ、

インド、東南アジアなどに分布。

日本各地の水辺でも普通に見られる。

留鳥だが、北部に住むものは冬に南下するため、

北海道や本州北部では夏鳥。普段はあまり飛ばず、

飛ぶ時は水上を猛スピードで泳ぎ、

何度も足で水面を蹴ってようやく飛び上がる。



おんぶで子育て

写真文 高田宮妃久子

今回は、ここ数年、赤坂御用地内の池で繁殖に成功しているカイツブリの子育て写真です。カイツブリは全国で見られる水生活の鳥で、水草の葉や茎を使い浮巣を作ります。雄は雌とともに抱卵・子育てをする優秀なイクメン(?)です。

抱卵期に巣から離れる場合は必ず卵を巣材で隠していきませんが、そのような親鳥のしぐさは私たちをやさしい気持ちにさせてくれます。ひとつの番は年間、数回繁殖を試みます。したがって子育て奮闘中の微笑ましい姿を見る機会は多いのですが、その健気さに心が痛むこともあります。繁殖回数が多いのは、一回ごとの産卵・子育ての成功率が低いことを意味するからです。

ヒナは孵化後一週間で巣から出るようになり、その段階でも泳げるので親鳥と一緒に行動します。写真でご覧のように、カイツブリはヒナをおんぶして育てることで知られています。ヒナが小さいうちは親鳥が背中に乗せ、翼でやさしく覆うようにして、外敵や体温の低下から守るのです。

背中に乗せて子育てといえ、私は若い頃、おんぶは日本独特の文化だと思っておりました。小学校3年生の頃にアメリカから日本に戻った時、おんぶ紐で背中に固定された赤ちゃんの姿を見て面白い習慣だと思ったのを覚えています。その後、英国やフランスで過ごしましたが、赤ちゃんは乳母車か抱っこでいたのですが、実は世界中多くの文化におんぶがあります。グリーンランドやカナダ北部の極寒地域ではアマウティという女性用のパーカーがあり、おんぶした赤ちゃんまですっぽりカバーします。驚いたことに赤ちゃんを中で前に回して授乳もできると聞きました。また、アフリカでは大きな布を使って、



赤ちゃんをお尻の上に固定していました。母親が歩くと揺られて落ち着くのだといいますが、地元的女性たちと私たち日本人とは体形的な差がかなりあります。日本のお母さん（そして赤ちゃん）にとって、「落ち着く」より「落ちそうな」状態ではないかと思えます。

我が家の三人が小さかった頃に、抱っこ紐が流行りだしました。赤ちゃんとのスキンシップを大事にする母親の気持ちは同じでしょうが、最近はまだおんぶ紐が少しずつ見直されているようです。赤ちゃんが高い位置におり、母親と同じ方向を見ていることや広く見渡せること、母親が振り返るとちょうど目が合う高さであることなどが良いとされています。

おんぶ紐がよりおしやれで便利にデザインされて復活すると思うとなんだか嬉しい気持ちになります。女性が社会で活躍する場面が増えてきた昨今、赤ちゃんの健康に害がない場合、職場におんぶ紐が登場するのも面白いかもしれません。昭和の古いイメージから一転、おんぶ紐が活躍する女性の大事な育児道具となる日がくるでしょうか。カイツブリの子育てを観察しながら、おんぶ紐の進化も見守っていききたいと思います。

カイツブリ

全長27cm カイツブリ科

一般の鳥に比べて足が体の後方に付いているため、歩くのは苦手だが、高速で泳ぎ、自由に潜ることが出来る。潜水時間は15秒くらいが多く、ヒナを背中に乗せたまま潜ることもある。足の指は、1本1本が木の葉のような特別な形。後ろに蹴った時は葉形の指が重なりヒレのように水を押す。前に引くと指はバラバラになり、水の抵抗を受けない。羽毛も密集し、潜水生活に適応している。